

# 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5

— 平成 7 年度 —

1996. 3. 31

香芝市教育委員会

## 序 文

奈良県の北西部、万葉の昔から親しまれてきた二上山の麓に香芝市が位置します。

昭和31年に人口15,600人でスタートした町制も平成3年10月に市制施行し、平成7年3月現在の人口においては56,300人を超えるに至っており、伝統産業を継承しながら一方では都市化の傾向を日々増しております。

市内各地には埋蔵文化財や有形・無形の文化財が数多く残されております。近年、大阪の都市圏に隣接する地理的条件からベッドタウンとしての宅地開発等がさかんとなり、それにつれて埋蔵文化財の発掘件数も増加の一途をたどっております。

このたび、平成7年度国庫補助金事業の一環として実施しました市内遺跡2件の発掘調査結果をとりまとめ、その発掘調査概報として刊行することになりました。

この発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この概報が多くの方々の目に触れ、当市の埋蔵文化財調査について深い御理解、御協力を頂ければ幸甚に存じます。

平成8年3月

香芝市二上山博物館

館長 石野博信

## 例　　言

- 本書は香芝市教育委員会が平成7年度国庫補助金事業（事業名：市内遺跡発掘調査）の一環として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 調査は、社会教育課二上山博物館学芸員山下隆次・下大迫幹洋が担当した。
- 遺跡の空中写真撮影及び地形測量は、株式会社アイシーに委託した。また、各礎石の石材鑑定については奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託の奥田尚氏に、文字瓦の判読は京都教育大学教授の和田萃氏、遺構及び遺物出土状況の写真撮影の一部は阿南辰秀氏にお願いした。
- 本書の執筆は調査担当者が分担し目次に明記し、編集は山下がおこなった。なお、塔礎石の石種については奥田尚氏から玉稿を賜った。
- 尼寺廃寺北遺跡の調査については、下記の方々からご協力・ご教示を賜りました。記して深く感謝致します。（五十音順、敬称略）

青木勘時・泉森 誠・猪熊兼勝・今津節生・上田 瞳・植野浩三・上原 和・近江俊秀・大駿 潔・岡幸二郎・岡崎晋明・岡田英男・奥田 尚・小澤 肇・堅田 直・金子裕之・亀田 博・河上邦彦・川越俊一・小泉俊夫・近藤康司・菅谷文則・鈴木嘉吉・瀬川芳則・高田良信・辰巳弘・伊達宗泰・田辺征夫・塚口義信・坪井清足・寺崎保広・中井一夫・中井 公・中島 正・西山良平・日塔和彦・野田芳正・花谷 浩・林博 通・原島礼二・原田憲二郎・樋口隆康・平田政彦・広瀬和雄・藤澤一大・藤原 学・堀池春峰・前沢郁浩・前園實智雄・町田 章・宮崎政裕・村田健一・森 郁夫・森 浩一・森屋直樹・山川 均・山中 章・吉村公男・和田 萃・和田晴吾

## 目　　次

発掘調査位置図・発掘調査一覧	1
1 尼寺廃寺南遺跡	2
I はじめに（山下）	2
II 遺跡の環境（山下）	2
III 調査の概要（下大迫）	3
IV まとめ（下大迫）	5
2 尼寺廃寺北遺跡	6
I 調査の概要	6
1 調査の方法と経過（山下）	6
2 おもな遺構・遺物（山下）	6
3 尼寺廃寺の塔礎石の石種（奥田）	14
II まとめ（山下）	15



第1図 発掘調査位置図

発掘調査一覧

	遺跡名	調査地番	調査期間	調査面積
1	尼寺廃寺南遺跡	尼寺2丁目193-3	平7. 6. 14~平7. 6. 23	56m <sup>2</sup>
2	尼寺廃寺北遺跡	尼寺2丁目76	平8. 1. 30~平8. 3. 31	100m <sup>2</sup>

# 1 尼寺廃寺南遺跡（尼寺廃寺跡第9次調査）

## I はじめに

香芝市では、近年急増する開発行為に対して文化財保護の観点から昭和56年度以来、毎年国庫補助金事業を継続的に実施している（現事業名：市内遺跡発掘調査）。その目的は、各遺跡の実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ蒐集と自己用住宅の建築に対応するためである。これまでには上山北麓遺跡群を中心に調査がすすめられ、多くの貴重な成果を得た。そして、平成3年度からは、開発によって景観がかわりつつある尼寺廃寺跡（尼寺廃寺北・南遺跡）の範囲確認調査を開始し、実態不明な寺院跡を解明する端緒となつた。

本年度は尼寺廃寺跡において、南遺跡では自己用駐車場建設に伴う事前発掘調査（尼寺廃寺跡第9次調査）を、北遺跡では範囲確認を目的に発掘調査（同第10次調査）を実施した。

## II 遺跡の環境

尼寺廃寺跡は奈良県香芝市尼寺に所在する寺院跡である。古くから尼寺の集落内で古瓦が多く出土し、現在も水田の畦畔等で散見できることから寺院跡の存在が考えられてきた。周辺地域をみると、尼寺の集落の西に位置する厨神社の裏山の北および西側でサヌカイトの原石が分布しており、打製石器や石礫が採集されている。また、この神社の境内には登窯と考えられる瓦窯（尼寺窯）があり、さらに、尼寺川をはさんだ南の丘陵にも6世紀後半から8世紀にわたる須恵器や瓦を焼いた窯跡群（平野窯跡群）が存在する（千賀 1982）。

さて、この尼寺廃寺跡であるが、古瓦が大きく北と南の2つの地域に分かれて分布している。北の地域は基壇状の高まりを中心に多く散布している。この基壇状の高まりは2カ所あり、その1つに今も礎石が残っていることから、平成3年度の国庫補助金事業ではこの西側を調査した（第1次調査）。その結果、西面回廊の一部



第2図 調査地周辺図

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1 第1次調査（平成3年度） | 2 第2次調査（平成4年度）   |
| 3 第3次調査（民間事業）  | 4 第4次調査（平成5年度）   |
| 5 第5次調査（民間事業）  | 6 第6次調査（民間事業）    |
| 7 第7次調査（民間事業）  | 8 第8次調査（平成6年度）   |
| 9 第9次調査（平成7年度） | 10 第10次調査（平成7年度） |
| A 奥跡堂          | B 般若院            |
| C 尼寺窯          |                  |

が検出された（田中 1992）。

そして、平成 6 年度の国庫補助金事業の調査において、金堂に伴うと考えられる雨落ちパラスと西面回廊の一部を検出し、今回調査した基壇が從来から塔跡と考えられていたことから、東向きの法隆寺式伽藍配置を推定するにいたった。

また、南の地域は役行者をまつる薬師堂を中心に古瓦が散布している。この薬師堂には、ほぼ原位置を保っていると考えられる礎石がいくつか残っており、その西約 50m にある般若院境内でかつて多くの軒丸瓦や軒平瓦が出土したことから、伽藍の一部がこの場所にあったと推定されている。

平成 4 年度においてこの南の寺院の東面回廊を確認するために、薬師堂の東約 75m の地点を調査した（第 2 次調査）。その結果、期待した回廊は検出できなかったが、尼寺創建当時と考えられる掘立柱建物跡や中世の館を囲んでいたと考えられる溝等を検出した（山下 1993）。なお、最近この般若院境内に一辺 1m をこえる礎石が残っていることを確認した。

この北の基壇状の高まりと南の薬師堂とは直線距離にして約 200m あることや、周辺の地形からみて、北と南の地域のほぼ中央に谷が存在し、この谷筋ではほとんど古瓦が出土しないことから、この尼寺廃寺跡を 1 つの寺院跡と考えずに、それぞれ北遺跡・南遺跡の 2 つに分けて考えられてきた。

平成 6 年度に実施した民間事業の調査において、この谷部分を 2 カ所調査した（第 5 次・第 6 次調査）。その結果、第 5 次調査では表土直下で地山が検出され、遺構・遺物は全く検出されなかっただ。しかし、第 6 次調査では約 1.5m 四方で深さ約 3m の素掘りの井戸と推定幅約 10m 以上の川跡を検出した。この川跡の検出によって、從来から指摘されていた南北 2 つに分かれる寺院跡であることが実証できた。

しかし、北遺跡の伽藍配置についても推定であり、今後の調査に期待するところが大きい。

### III 調査の概要

尼寺廃寺跡では、これまで平成 4・5 年度に 2 次の発掘調査を実施しており（第 2・3 次調査）、奈良時代～室町時代に亘る掘立柱建物跡や井戸・土坑等が検出されている。

今回の調査地は、第 2・3 次調査地から西へ約 100m、尼寺廃寺跡の中心地と推定されている般若院と薬師堂のほぼ中間地点で、自己用駐車場建設のため平成 7 年 4 月 28 日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。

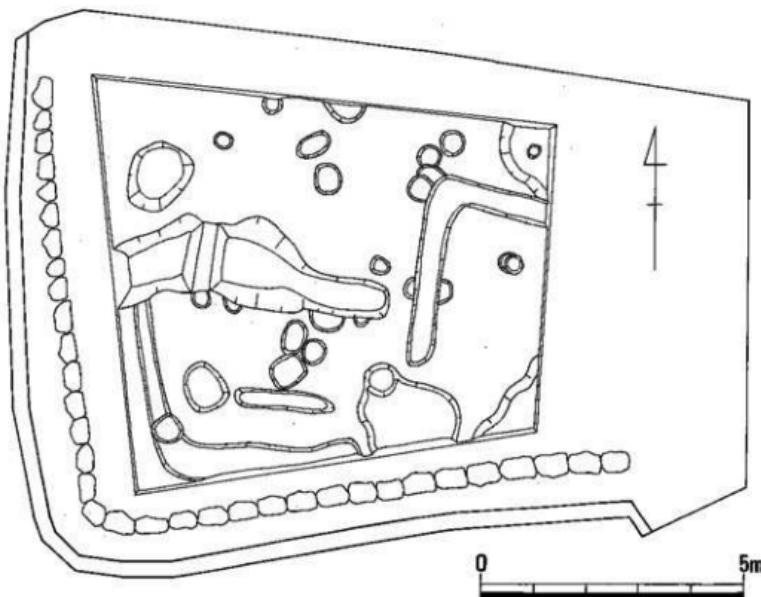
香芝市教育委員会では事業面積が約 62m<sup>2</sup> と小範囲の面積にとどまるものの、堂・塔などの何らかの建物跡が推定されている般若院と薬師堂の中間地点に位置しており、尼寺廃寺跡の実態を解明していくうえで何らかの重要な手掛かりとなる遺構が検出される可能性があるため、事業者および所轄関係機関と協議のうえ発掘調査を実施することとなった。

現地調査は事業面積 62m<sup>2</sup> に対して、事業面積のほぼ全域に相当する約 56m<sup>2</sup> の調査区を設定して人

力による発掘調査を実施した。

調査区の基本層序は、上から①暗灰色砂質土層（現地表面、耕作土）、②黄褐色砂質土層（地山の黄褐色粘質土塊を含有する）の擾乱土層となり、現地表下約15cmたらずの地点で尼寺廃寺北・南遺跡付近一帯の基盤層である③黄褐色粘質土層に至る。基盤層の黄褐色粘質土層は現況地形に沿って、調査区北西から南東にかけてわずかながらも緩やかに下方へ傾斜しており、地形的に低い調査地南東側では人為的な整地土層である暗灰褐色砂質土層が薄く介在する。遺構検出面は付近一帯の基盤層である黄褐色粘質土層上面で、現代の開墾等によって削平・擾乱を受けているものの、柱穴やバラス敷きの雨落ち溝2条、暗渠排水1条、土坑3基等を検出した。これらの遺構はいずれも同質の埋土（暗灰褐色砂質土層）で埋積されており、各遺構の埋土や堆積土中からは18～19世紀の瓦片や陶磁器等の近世遺物が出土した。検出遺構および出土遺物の概要から18～19世紀に形成された江戸時代中頃～明治初期の建物に伴う遺構群と思われ、発掘当初から期待されていた尼寺廃寺南遺跡に所在が推定されている寺院の創建および存続時期にあたる奈良時代～鎌倉時代？の遺構等は皆無であり、また、当該時期の遺物も極めて僅少であった。

調査期間は平成8年6月14日から同年6月23日まで、調査総面積は約56m<sup>2</sup>であった。



第3図 遺構平面図

## IVまとめ

今回の第9次調査をはじめ、これまで尼寺廃寺南遺跡で実施してきた合計3次の調査成果から、第2・3次調査で検出された寺院の僧坊跡と推定される掘建柱建物群（居住域）は、現在、南遺跡の寺域の中心部と推定されている今回の第9次調査地付近にまでおよばないことや、また、近世中頃には般若院の東側に建物跡が建てられることなど尼寺廃寺南遺跡における近世の新たな土地利用の実態が明らかとなった。これらの建物跡は、地元に残る伝承や付近に点在する周辺寺院の過去帳等から明治初期の焼仏毀釈まで般若院の東方に存在したと推定されている薬師寺に関連する遺構群と考えられる。

南遺跡では、寺域の中枢部と推定されている般若院境内や薬師堂に遺存する基壇状の構築物とそれに伴う礎石列の時期や関係、回廊の有無等、寺の主要伽藍配置の解明が進展しておらず、まだまだ不明な点が多く残されているが、周辺地域の細密な発掘調査を通して尼寺廃寺南遺跡および尼寺廃寺跡の実態解明に努力したい。

## 参考文献

- 石田茂作 1936 「飛鳥時代寺院址の研究」  
 田中史生 1992 「尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報」 香芝市教育委員会  
 千賀 久 1982 「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」(「奈良県遺跡調査概報」)  
 保井芳太郎 1932 「大和上代寺院志」  
 山下隆次 1993 「尼寺廃寺南遺跡発掘調査概報」 香芝市教育委員会  
 山下隆次 1994 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報1」 香芝市教育委員会  
 山下隆次 1995 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3」 香芝市教育委員会

## 2 尼寺廃寺北遺跡（尼寺廃寺跡第10次調査）

### I 調査の概要

#### 1 調査の方法と経過

今回の調査はこれまでの調査成果をうけて、基壇が從来からの推定通り塔跡であるかどうかを確認し、伽藍の中軸線を決定することによって、より正確な伽藍配圖を復元することを目的に実施した。

なお、この基壇の土地所有者が大蔵省であることから、直接管理している近畿財務局奈良財務事務所と協議し、発掘調査についての承認を得た（平成7年8月10日付け奈財管第315号）。

この基壇は現状で南北11.2m、東西9.6m、高さ約2mで、一見方形壇に見え、さらに、瓦が大量に堆積していることから地元では瓦塚と呼ばれてきた。

調査は、まず掘削前に現状の地形測量を行ったあと、幅60cmのアゼを東西及び南北に設定した。なお、東西南北の基準杭は国土座標により設定した。

掘削は1月30日から開始した。東側で一部露出している2個の礎石のレベルを基準に、アゼを残しながら四方の堆積土を除去することから始めた。この堆積土のほとんどは瓦で、すべて除去すると12個の礎石（四天柱礎4、側柱礎8）が検出された。そして、土層断面図を作成したあと南北アゼを除去した。

次に、東西アゼを除去して平面を精査したところ、四天柱の礎石に囲まれた中心部の約1.2m四方は、周囲で検出した版築土と違ひ瓦やバラスが混じる暗灰色の擾乱土が堆積していた。そのため、当初、心礎の抜き取り穴と考えてその擾乱土を除去したところ、中央部がくぼむ土坑となった。しかし、この土坑の底の土は版築土と違ひ、あまり堅くしまっていなかったため、さらにその下を掘削し始めたが、約30cm掘り下げても版築土に達することができず、また、土層の変化もあまりみられなかった。そこで、基壇を南北にたち割って、基壇の構築状況とともにこの中央部の土坑の性格を断面で確認することにした。その結果、基壇中央部の地下約1mから南北3.8mの巨大な心礎とともに、その柱座から耳環3点が出土した。

そこで、心礎柱座については幅10cmのアゼを東西・南北方向に設定して慎重に掘り下げ、たち割り部分については地山まで掘り下げる作業を併行して進めることにした。

また、基壇の規模を確認するためにたち割りを北へ延長し、基壇北側の畠でトレッチを設定した。その結果、後世の削平等によって、地覆石など基壇の規模を確認できる遺構は検出されなかつたが、雨落ちのバラスと、その北側で焼け落ちた状態で堆積している瓦を検出した。

#### 2 おもな遺構・遺物

## (1) 遺構(第4図)

## ① 基壇

基壇の一辺の長さについては、四方が地覆石を含め後世に削りとられているため、正確な数値は不明である。しかし、心礎柱座の中心から北側で検出した雨落ちバラスまでの距離が6.9mであることからすると、一辺は13.8mを越えることはない。また、高さについては北側の雨落ちバラスから、検出した基壇上面まで約1.2m、礎石の上面までは約1.45mである。したがって、本来の基壇の高さは1.4mほどであったと思われる。なお、基壇上面についてはかなり擾乱されているため、創建当時の状況は不明である。

基壇構築法については、まず、掘り込み地業は南北7.2m（心礎北端から北へ2.7m、心礎南端から南へ0.7m）の範囲で旧地表面を約0.4m掘り込んでおり、基壇全体には及んでいない。また、この深さはほぼ旧地表面から地山まで、地山は最大でも約0.1mしか掘り込んでいない。そして、掘り込みの底から約1.4mの高さまで版築し、中央部に南北約6.5mの心礎を入れる穴を掘っている。そして、心礎を引き込むのであるが（十層の状況から南から引き込んだと考えられる）、引き込むスロープは約45°の傾斜で、スロープの法面の底から上面までが約2mしかなく、約3.8mの心礎を引き込むにはかなり無理があったと考えられる。そのため、引き込む際に心礎が2つに割れたと考えられ、柱座部分を残して埋めてから、柱座を凝灰岩や花崗岩の板石で補修して心柱、添柱を立ててそれぞれの柱にベンガラを塗る。この“柱座部分を残して埋めてから”ということについては、柱座を残して埋めた土層と根巻き粘土層の間に凝灰岩の粉やベンガラが薄く堆積していたことによる。次に、添板で心柱・添柱の周囲を囲み、ドーナツ状に粘土を巻いて（根巻き粘土）心柱等を固定している。この根巻き粘土の厚さは添板に接する部分では心礎上面から約0.6m、範囲は添板から北は約0.8m、南は約0.85mである。そして、版築しながら四天柱や側柱の礎石を引き込むためのスロープをつくって各礎石を据え、心礎上面から約1.2m（基壇の高さを1.4mとした場合）版築して基壇を構築している。

## ② 雨落ちバラス

基壇の北側で、基壇の規模を確認するために設定したトレンチで検出した。幅0.4mで屈曲することなく、東西方向にまっすぐのびている。このバラスの北側で、瓦が焼け落ちた状態で出土した。

## ③ 足場丸太穴

基壇上で、四大柱礎と側柱礎の間に、直径0.3~0.9mのピットが約2.5mではば等間隔で並んでいる。東側の中央のものがややすれているが、配置から考えて足場丸太穴の可能性が考えられる。

## ④ 紋石

13個（心礎1、四天柱礎4、側柱礎8）の礎石を検出した。

まず、心礎は南北3.8m、東西の長さについては添板の痕跡を検出したことなどから、発掘によって確認することができなかった。そこで、地下レーダー探査により調査したところ、東西も約3.8

mであることが判明した。これまで日本最大であった久米寺（権原市）の心礎（3.9m×2.9m）をこえる大きさである。厚さは中央部で約1.2mである。図面で復元すると、四天柱礎が心礎の四隅にのるように据えられている。心礎の中心には差し渡し78cm、深さは北側で約8cm、南側で約15cmを測る心柱の柱座が、それに接して添柱穴が4個穿たれている。この心礎の形式は橋寺式に分類され（岩井 1982）、法隆寺若草伽藍等に類例がある。また、この心礎は中央で北西から南東方向に割れていた。北側が南側より約8~10cm低い。そのため、心柱を立てるにあたって、この低い北側の柱座部分に、まず、凝灰岩を敷いて、その上に厚さ2~4cmの花崗岩の板石を柱座の形に形成してはめこみ、さらに、凝灰岩を敷いて南側と高さをそろえていた。そして、その上に約5~6cmの厚さで炭を敷きつめている。この炭は心柱の腐食を防ぐために敷きつめられたと考えられ、炭の直上で耳環などの舍利荘具が出土した。また、柱座の周囲にベンガラが付着していたことから、心柱や添柱にベンガラが塗られていたと推測される。

なお、この柱座から心柱、及び添柱を復元すると、まず、柱座の形状が丸みをおびていることから、心柱は丸柱であったと考えられる。そして、柱座が若干すり鉢状を呈しており、心柱が据えられていたと考えられる柱座のほぼ底面（炭の直上）で直径が76cmであることから、心柱はこの大きさであったと推測される。また、添柱については、添柱部分の柱座内の周囲には凝灰岩が残っており、この凝灰岩は添柱を立てたあと添柱を固定するために、添柱と柱座のすきまにつめられたものと考えられる。この遺存していた凝灰岩から添柱を復元すると、添柱の直径は約24~26cmであったことが推測される。

四天柱礎はいずれも大きさが1.3~1.8mで、北西の1個をのぞいて、直径約0.8mの柱座をつくり出している。柱間は2.36mである。

側柱礎は8個残っていた。北東隅の1個と西側の3個が抜き取られている。なお、西側で残っていた1個と南東隅のものについては、後世に削られたり、風化による表面の剥離が進んでいるため、本来の形状は確認できない。礎石の大きさは、最大で2.3m×1.7m、最小で1.5m×1.0m。いずれも直径0.8~0.9mの柱座をつくり出しておらず、北西のものは地覆座が西にのびているのが確認できる。また、柱間は2.36mで四天柱礎との柱間も同じである。

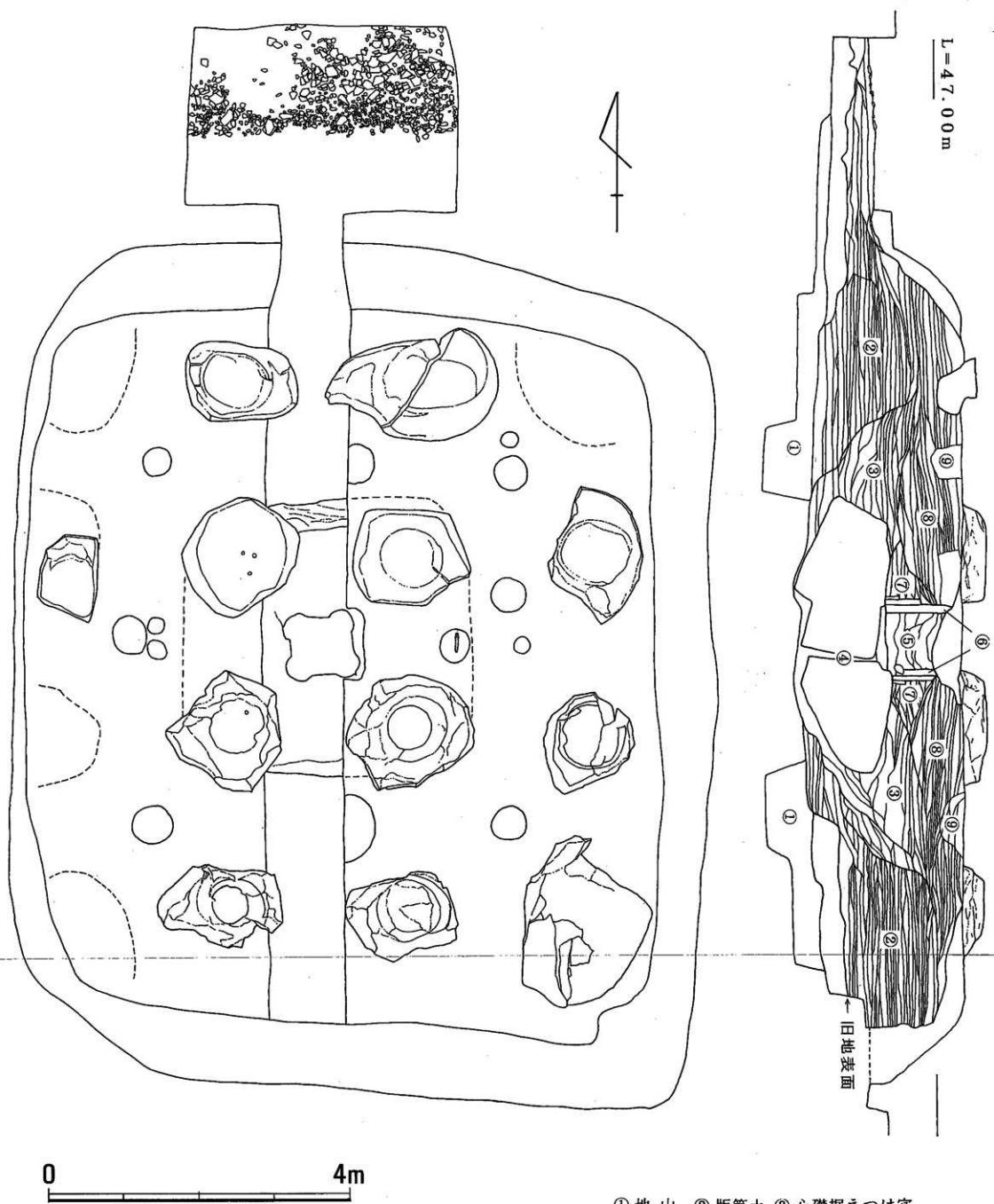
以上、礎石から塔の規模は、初層一辺長が7.08mで3間×3間の8尺等間であることが判明し、柱間が2.36mであることから、1尺=29.5cmとなり唐尺の使用が考えられる。

##### ⑤ 添板痕跡

心礎柱座の東側の壁面で、心礎上面から0.6~0.7mの高さまで検出した。本来は基壇上面まであったと思われる。その痕跡から添板は幅8~15cm、厚さは添柱を固定していたと思われる凝灰岩や柱座までの間隔から、約5~7cmと推定される。

#### (2) 遺物

##### ① 基壇上の堆積土



第4図 遺構平面図・東壁断面図

約2mの堆積土から大量の瓦片等が出土した。

#### 軒丸瓦（第5図）

1・2は坂田寺式の単弁8弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+8の蓮子を配す。21点出土した。うち2点にヘラで文字が刻まれていた。

3～5は川原寺式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+6+12の蓮子を配す。これまでの調査で2点しか出土していなかったが、今回の調査で21点出土した。

6は中房に1+7+12の蓮子を配す、複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。外区に面連鋸歯文をめぐらせ、斜線の外側に平坦面を設けている。蓮弁及び子葉は平坦である。この瓦は27点出土した。

7・8は中房に1+7+13の蓮子を配す、複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。外区に面連鋸歯文をめぐらせ、斜線の外側に平坦面を設けている。6と比べ蓮弁及び子葉がやや肥厚する。29点出土した。

9は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で外区に線鋸歯文をめぐらす。中房に1+6+10の蓮子を配す。8点出土した。

10・11は藤原宮式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+5+9の蓮子を配し、外区内縁に連珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。6276G型式に分類される。22点出土した。

12は中央に1+4の蓮子を配す、4重圓文軒丸瓦である。8点出土した。

13・14は平城宮式の単弁蓮華文軒丸瓦である。6133型式に分類される。2点出土した。

15・16は単弁12弁軒丸瓦で中房に1+8の蓮子を配す。55点出土した。

17・18は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+8の蓮子を配し、外区には唐草文をめぐらす。3点出土した。

19は単弁10弁蓮華文軒丸瓦で中房に1+8の蓮子を配す。1点出土した。

20～22は巴文軒丸瓦である。

#### 軒平瓦（第6図）

1・2は型引き2重弧文軒平瓦で9点出土した。なお、2の瓦は凸面に布目がみられる。

3は3重弧文軒平瓦であるが、竹管で施文された珠文がならぶ。

4・5は型引き3重弧文軒平瓦で8点出土した。

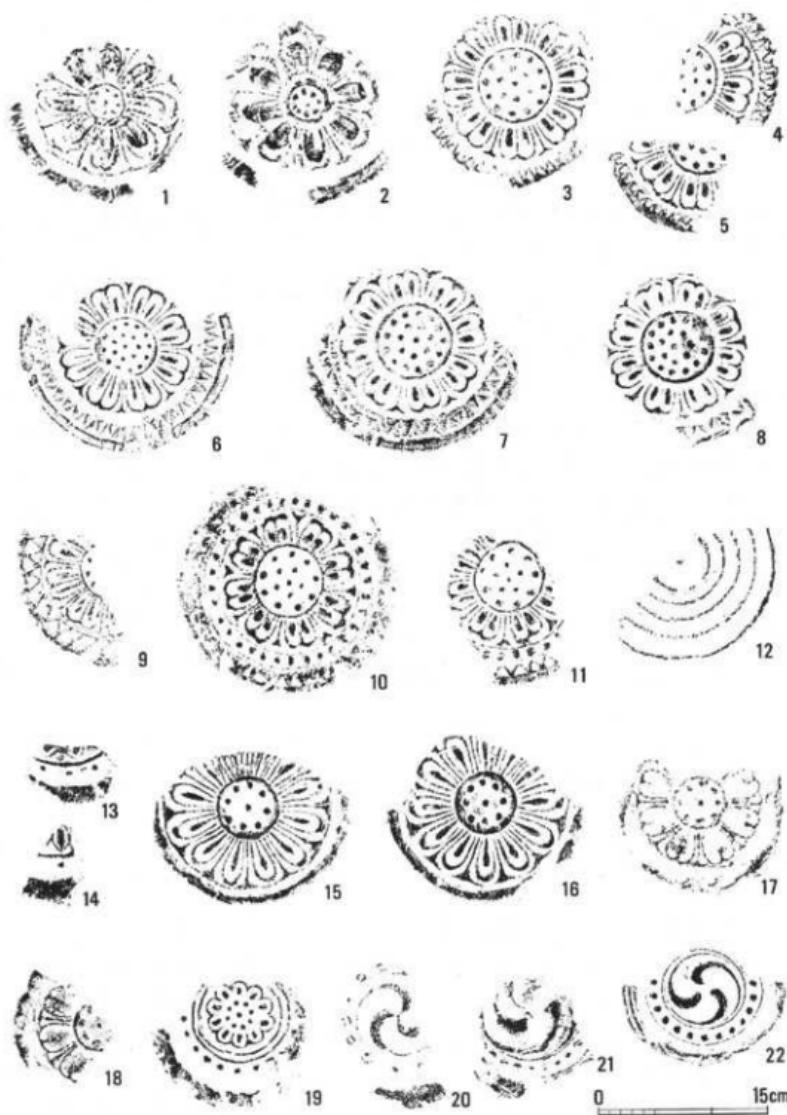
6は重廓文軒平瓦で1点出土した。

7は重弧文軒平瓦で、瓦当面に型押しの細い2重弧文を施文している。1点出土した。

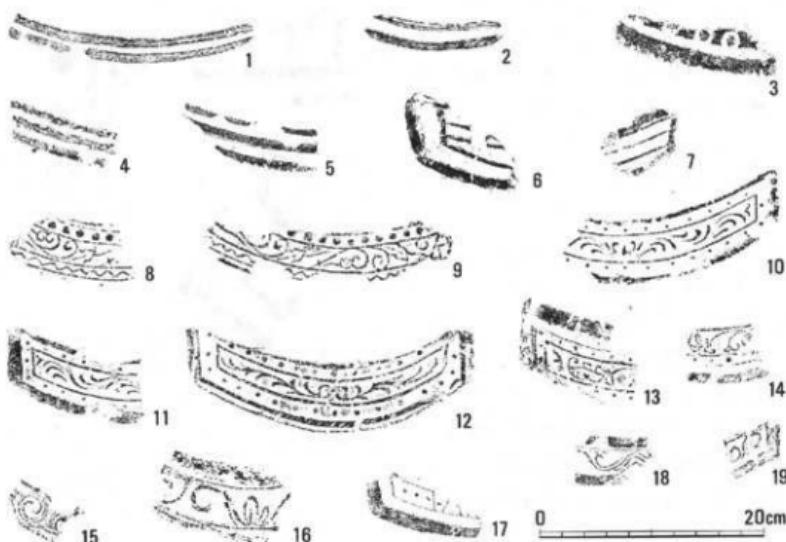
8・9は内区に左から右に流れる偏行唐草文をおき、上外区に連珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配す。この瓦はこれまで、南遺跡内に所在する般若院境内でしか出土していなかったが、今回の調査で10点出土した。

10・11は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文を配す。23点出土した。

12も均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文を配す。20点出土した。なお、左半分は第1次調査（平成3年度）で出土した破片で、今回の調査で出土したものと接合した。



第5図 軒丸瓦



第6図 軒平瓦

13・14は均整唐草文軒平瓦で、13は第1次調査で1点出土している。

15は連巴文軒平瓦、16については尼寺廃寺跡ではじめて出土したが、北約1.7kmに所在する片岡王寺跡でも出土している。

17は連珠文軒平瓦で、1点出土した。第4次、第8次調査でそれぞれ1点ずつ出土している。

#### 文字瓦（第7図）

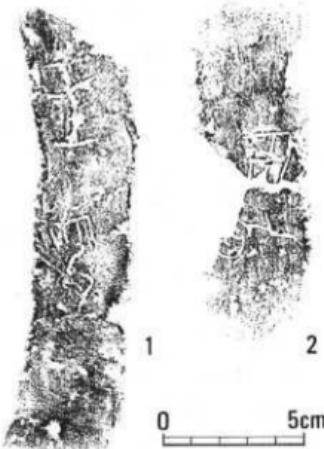
2点出土した。いずれも坂田寺式軒丸瓦の頸部にへり書きされている。

1は2文字書かれている。1字目は「王」と判読できる。2字目は「岡(剛)」の異体字の可能性もあるが、現段階では断定できない。

2も2文字書かれている。1字目は「田」の可能性もあるが、割れているため正確に判読できない。2字目については不明である。

#### 鰐尾（第8図）

かつて鱗部の破片が1点報告されているのみ（保井



第7図 文字瓦

1932) であったが、今回の調査で7点出土し、ほぼ全体を復元するにいたった。

1は頭部に近い破片で、幅1.5cmの縦帯2条と鰭部に幅3cmの正段型を削り出している。

2は基底部の破片で基底部にはワラ状圧痕が残る。幅1.5cmの縦帯2条と直径2~2.5cmの連珠文を配している。

3は鰭部の破片で、幅3~4.5cmの正段型を削り出し、鰭部端に幅1.5cmの断面半円形の突帶をめぐらせて縁取りしている。

#### 鰐尾復元(第9図)

第8図1~3の破片、及びその他の破片から復元すると、幅1.5cmの断面半円形の縦帯が2条1組で連珠文をはさみ、鰭部は外面に正段型を削り出して幅1.5cmの突帶で縁取りする構成となる。なお、破片が出土していない頭部等の部分については推定で復元した。今後、不明な部分の破片が出土することを期待する。

その他、近世の陶磁器もかなり出土した。この近世の陶磁器は基壇直上からも出土しており、その時期まで礎石が露出していたか、また、この礎石を使った何らかの建物が建っていたと考えられる。

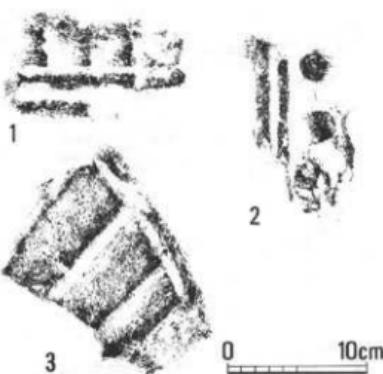
#### ② 基壇

東側の四天柱礎の中央やや東よりで、南北54cm、東西38cm、深さ2cmの土坑があり、刀子1点が基壇蔵具として埋納されていた。切先を

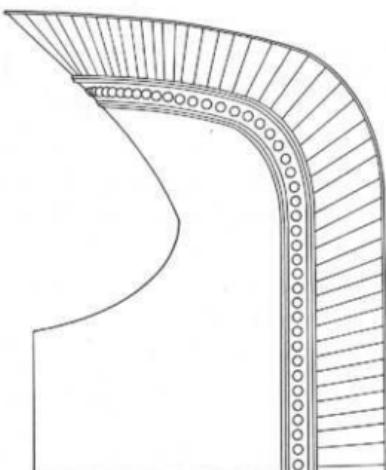
南に向かって、やや北に傾斜して埋納されていた。南側については攪乱によって欠けている。本来この土坑は基壇を復元すると、20cmほどの深さがあったと考えられる。

#### ③ 心礎柱座(第10図)

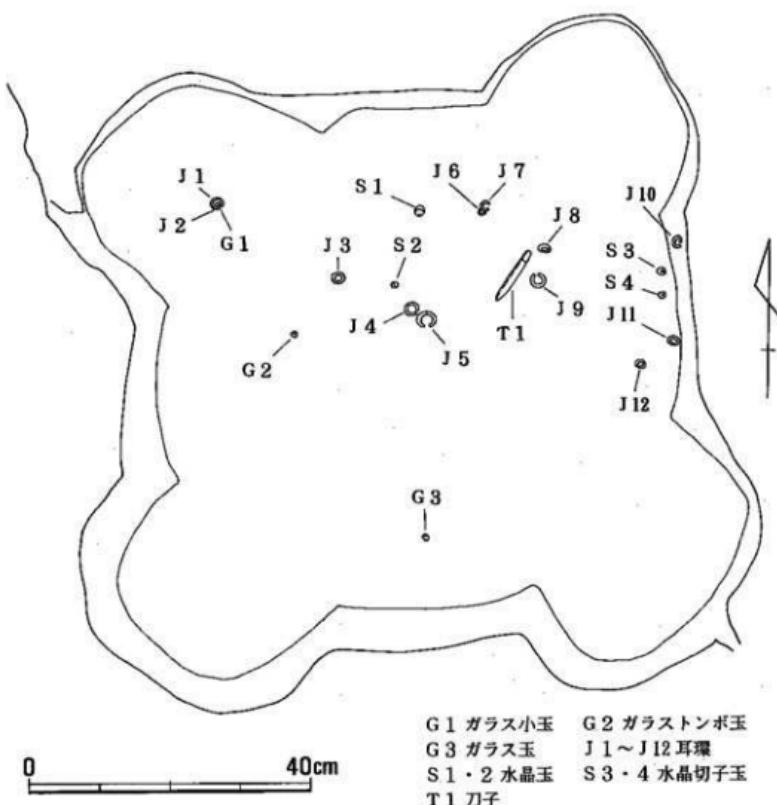
耳環12点、水晶玉4点、ガラス玉3点、刀子1点の舍利蔵具が出土した。出土位置は大きく3カ所にわかれれる。まず、中心よりやや北側で耳環7点、水晶玉2点、ガラストンボ玉1点、刀子1点が南北18cm、東西37cmの範囲で出土した。この状況から、心柱の根本付近に北から抉りを入れて、



第8図 鰐尾



第9図 鰐尾復元図



第10図 心礎柱座内遺物出土状況

それを埋納孔として納められていたと推測される。そして、心柱が腐って落下し、この範囲に散らばったと考えられる。また、これら舍利莊嚴具にはベンガラが付着していた。このことから、舍利莊嚴具が納められていた埋納孔の内側にもベンガラが塗られていたと考えられる。

次に、心礎柱座内の東側ではほぼ柱座に接した状態で耳環3点、水晶玉（切子玉）2点が出土した。このうち、耳環1点は柱座に張り付いた状態で、また、水晶玉2点は立った状態で出土した。このことから、心柱を立てたあと柱座とのすき間に納められたことが考えられる。

そして、柱座の北西部で、耳環2点が接して立った状態で、ガラス小玉1点がその耳環の内側から出土した。この位置は、心柱を復元すると心柱が添柱に接する部分にあたる。このことから心柱を立てたあと、添柱を立てる際に間にはさみ込む状態で納められたと推測される。

### 3 尼寺廃寺の塔礎石の石種（第11図）

尼寺廃寺の塔跡に見られる礎石と今回の発掘によって検出された心礎を裸眼で観察した。礎石の石種は細粒黒雲母花崗岩、粗粒黒雲母花崗岩、弱片麻状中粒黒雲母花崗岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、斑状中粒黒雲母花崗岩である。心礎は斑状中粒黒雲母花崗岩であり、上面に流紋岩質火山疊凝灰岩の潰れたものが付着している。これら石種の特徴とその推定される採石地を近距離で求める。

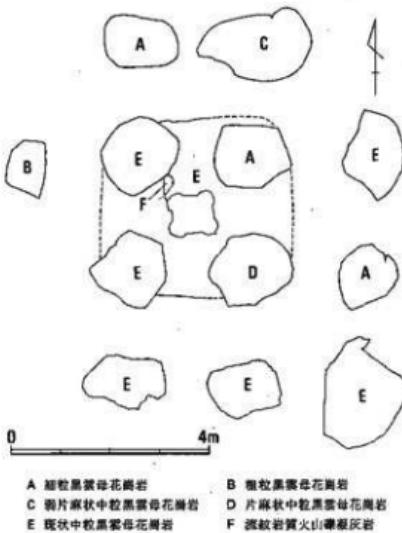
**細粒黒雲母花崗岩：**色は灰白色で、白色の厚さ5cmの長石脈がみられる。石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が多い。

**粗粒黒雲母花崗岩：**色は灰白色で、レンズ状に伸びた粒状の黒雲母がみられる。レンズの長径が6mmに及ぶものもある。石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。石英は無色透明、粒径が2~6mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3~8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~6mm、1mmぐらいのものが多く、量が僅かである。

**弱片麻状中粒黒雲母花崗岩：**色は灰白色で、僅かに片麻状を示し、片麻状の方向に黒雲母が並ぶ。石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

**片麻状中粒黒雲母花崗岩：**色は灰白色で顕著な片麻状を示し、鉱物粒が片麻状の方向に並ぶ。黒雲母が線状に並び、縞模様をなす。石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。石英は無色透明、粒径が2~3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2~8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量がごく僅かである。

**斑状中粒黒雲母花崗岩：**色は灰白色で、灰白色の長石の斑晶が散在する。斑晶は球状をなし、粒径が4~30mm、量が僅かである。基質は石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。石英は無色透明、粒径が1~3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1~3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。



第11図 紋石の石種

A 細粒黒雲母花崗岩      B 粗粒黒雲母花崗岩  
C 弱片麻状中粒黒雲母花崗岩      D 片麻状中粒黒雲母花崗岩  
E 斑状中粒黒雲母花崗岩      F 流紋岩質火山疊凝灰岩

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色で、黒色の松脂岩礫が散在する。構成礫種は松脂岩と軽石である。松脂岩は黒色、ガラス質で、粒形が角、粒径が1～8mm、量が中である。軽石は白色、粒形が亜角、粒径が3～5mm、量が僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

以上のような岩相を示す岩石を近くで求めれば、発掘地北方の明神山東方には片麻状を示す黒雲母花崗岩や黒雲母花崗岩が分布する。また、北方の葛下川の川原や王寺の南方にかけての付近には片麻状黒雲母花崗岩や黒雲母花崗岩の礫がみられる。岩相的には細粒から中粒で、長石が多く、黒雲母が少ない黒雲母花崗岩である。また、部分的には片麻状や斑状を示す部分がある。礫石の表面は水磨されたようで、川原石である。このようなことから、当発掘地北方の川や谷川に転がる石を探石したと推定される。

## II まとめ

まず、創建年代についてであるが、出土した最も古い軒丸瓦が坂田寺式であること、建築に唐尺を使用した可能性が考えられることなどから、650年前後から複弁蓮華文軒丸瓦が出現する660年代後半頃までと考えられる。

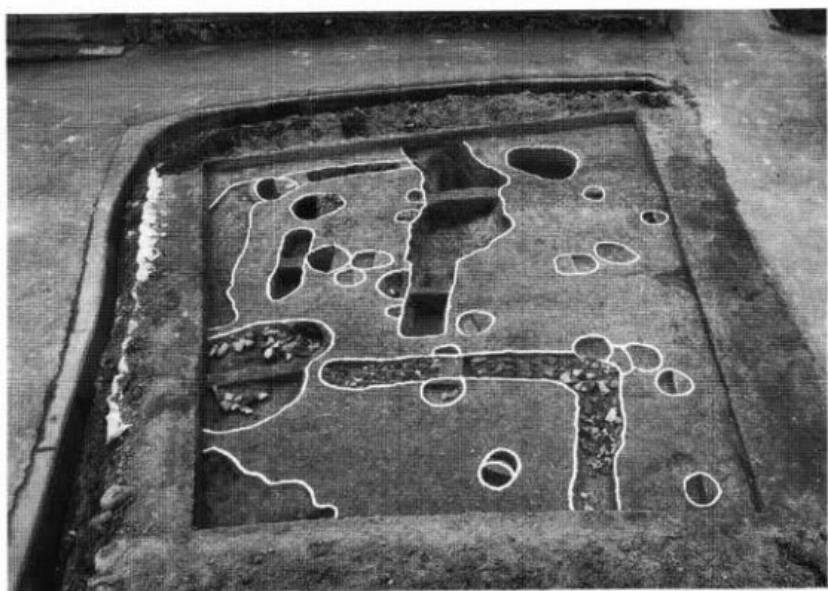
また、創建にかかわった氏族については、聖徳太子の一族である上宮王家とする説と敏達天皇系の王家とする説に議論がわかっている。現時点では結論が出せない状況である。

今回の調査で基壇構築法がはっきりしたことや、心礎柱座から耳環等の舍利莊嚴具が出土したこと、心礎が日本最大であることなど多くの成果があった。また、今回は北遺跡の調査であったが、今後、南遺跡の伽藍配置等が解明されれば、この北約1.7kmにある片岡王寺との関係についても新しい解釈ができる。つまり、これまで片岡王寺を僧寺とし、この尼寺廃寺跡を尼寺としてとらえられてきたが、尼寺廃寺跡の北遺跡と南遺跡で僧寺・尼寺の関係を考えることもできる。また、伽藍配置についても昨年の調査で東向きの法隆寺式を推定したが、今回の調査で創建が飛鳥時代にさかのぼることが確実となり、四天王寺式の可能性も残された。

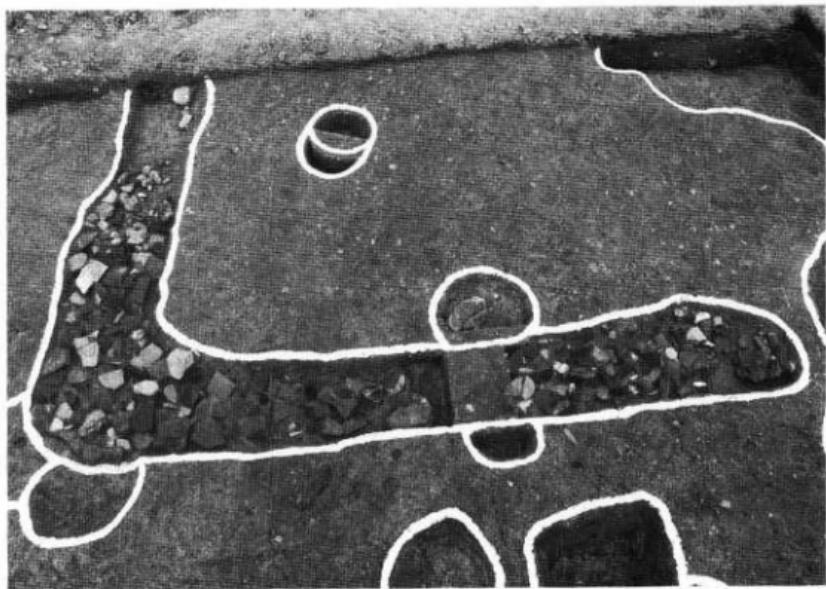
最後に、今回の調査では遺構・遺物など検討すべき課題が多くあり、ご多忙の中、発掘現場等でご指導いただいた諸先生方のご教示を本書で十分生かせなかった部分も多々ある。今後ともご指導、ご叱正をお願いする次第である。

## 引用・参考文献

- 岩井隆次 『日本の木造塔跡』 雄山閣1982
- 石田茂作 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』
- 田中史生 1992 『尼寺廃寺跡発掘調査概報』 香芝市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 翡翠資料館 1980 『日本古代の鶴尾』
- 保井芳太郎 1932 『大和上代寺院志』
- 山下隆次 1995 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報3』 香芝市教育委員会



完掘状況（東から）



雨落ち溝（西から）



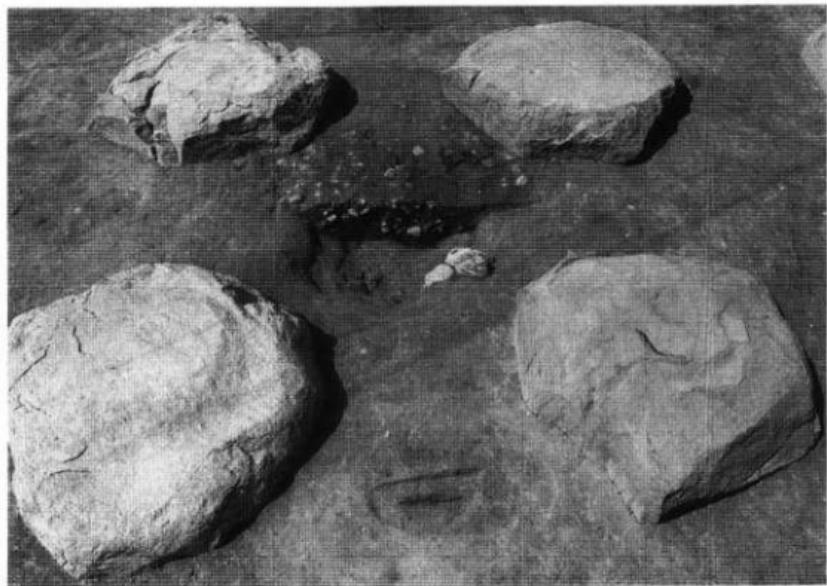
調査前の景観（西から）



基壇上堆積土除去後（西から）



基壇上堆積土断面（南から）



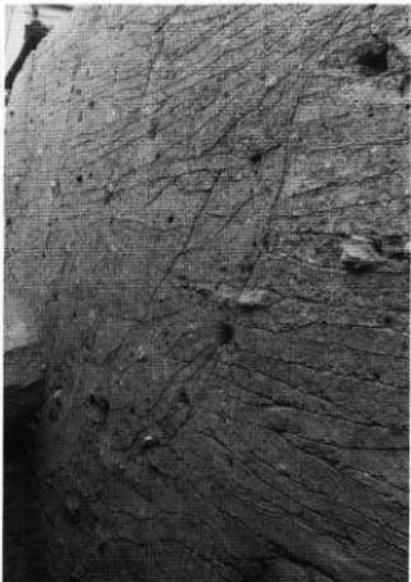
四天柱礎・心柱空洞落ち込み状況（東から）



心柱空洞・根巻き粘土（南西から）



東壁南側土層断面（南西から）



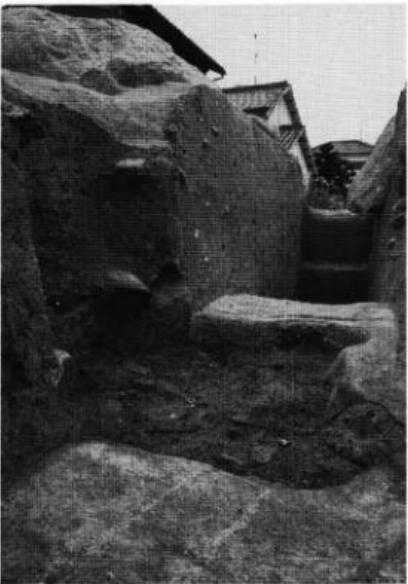
心礎据えつけ穴（南西から）



添板痕跡（西から 左が北）



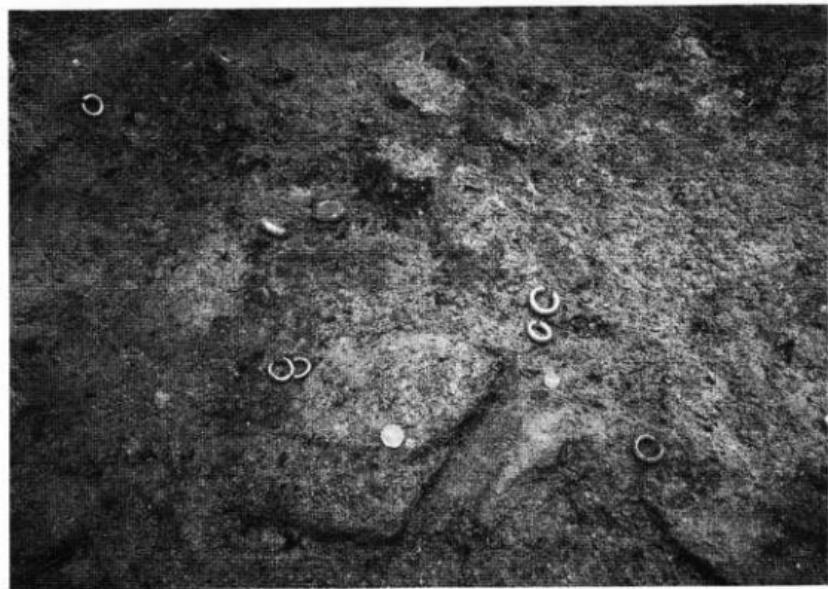
心礎柱座・添板痕跡（西から）



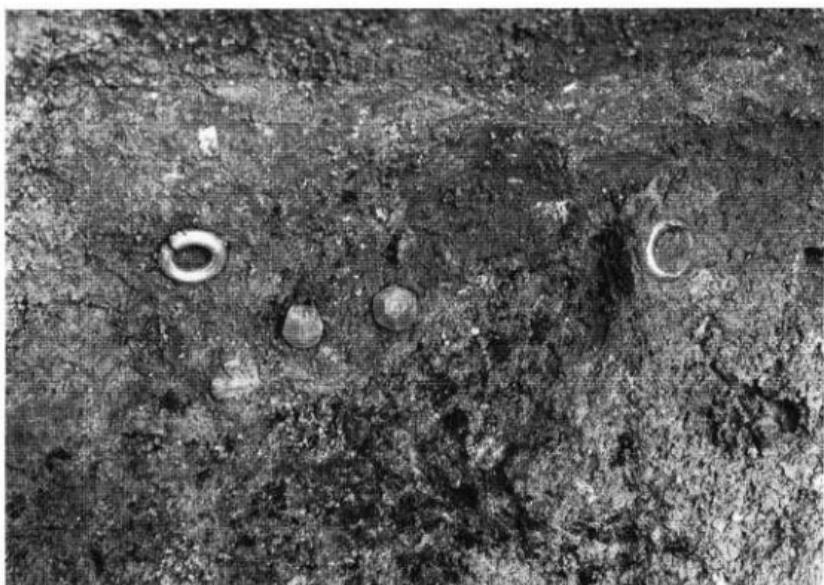
心礎柱座舍利莊嚴具出土状況（北から）



舍利莊嚴具出土狀況（上から 左が北）



舍利莊嚴具出土狀況近景（北西から）



心礎柱座東側舍利莊鐵具出土狀況近景（西から）



心礎柱座完掘状況（北から）



調査地全景（北から）



調査地全景（南から）

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 5

— 平成 7 年度 —

発行 香芝市教育委員会

香芝市本町 1397 番地

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京終町 3 丁目 464 番地